

消炎鎮痛剤を考える 広報げろ 2021.9

日常よく経験する筋肉痛や関節痛ばかりでなく災害時などで被る外傷時には、痛み、腫れ、発熱などに対して消炎鎮痛剤を使用します。投与方法には内服薬、湿布、注射などがあります。今回は内服で使用する消炎鎮痛剤の話です。

消炎鎮痛剤は効能によって、ピリン系を含む非ステロイド系（NSAIDs）とアセトアミノフェンなどに分けられています。非ステロイド系抗炎症剤の働きは炎症を引き起こす物質（プロスタグランジン）を作り出す酵素（COX1, COX2）の働きを抑えることによって、腫れ、疼痛、発熱を抑える作用です。COX1 を抑える薬は胃腸障害を引き起こす副作用がありますが、その対策として COX2 をより選択的に抑える薬が開発されています（COX 選択）。

炎症反応は本来生体の防御反応であり、これを抑えることは、相反することとも考えられます。さらに、消炎鎮痛剤は症状を抑える働きはありますが、原因を治療するものではありません。

アセトアミノフェンは古くから使われていますが作用機序の詳細はまだ解明されていません。過度の使用に際しては肝機能障害を引き起こすことがあるとされています。鎮痛解熱作用はありますが抗炎症作用は少ないとされ、ワクチンの副反応抑制に推奨できる薬剤とされています。その他の非ステロイド系消炎鎮痛剤については使用しない方がよいという根拠はまだ示されていないようです。ともあれ炎症が引き起こす腫れ、疼痛、発熱などの肉体的にも、精神的にも耐えがたい症状を抑えることは体にとって急性期を乗り切る効果的な方法と考えます。服用している薬についてはわからないところは医師や薬剤師にたずね、その効能、使用上の注意点をよく知ったうえで使用しましょう。【表】に現在使われている代表的な消炎鎮痛剤を示します。市販薬は合剤が多いので、注意が必要です。

下呂市立金山病院 顧問 古田智彦